

幼児教育において育みたい 資質・能力を育むために ～「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」から～



「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」とは具体的にどのような姿なのでしょう。また、遊びを通してどのような資質・能力が育まれているのでしょうか。幼児教育において育みたい資質・能力を育むために、何を大切にすればよいのか考えていきましょう。

「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」とは

●5歳児後半の遊びの場面から

①何をしているのかな？



雲ていの上から下まで、
雨樋をつなげたんだね。
何をしたいのかな？



雲ていの下に掘った穴まで、
雨樋をつなげて水を流そうと
しています。途中で水が
こぼれるたびに、友達と
アイディアを出しながら、
雨樋の向きやつなげ方などを
工夫しています。

②どこに運ぶのかな？



急いでいる
みたいだけど、
重くないのかな？



早く！
早く！

オーライ、
オーライ！

バケツに水を汲んで、何度も
運んでいます。

③声をかけながら…



友達と一緒に
やっているね。



あげるよ！

樋の向きを直したから、
今度はきっと大丈夫だよ！

水が入ったバケツを、滑車
を使って雲ていの上まで引き上げ
ます。

④やってみよう！



今度は
うまくいくかな？



やった！
やっとなんた！！

水を流します！！

⑤ばんざーい！！



とても
嬉しそうな表情！
よかったね！



下の穴まで水がたどり着き
ました。

「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」とは、幼児教育において育みたい資質・能力が育まれている幼児の具体的な姿です。この事例の場面から、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」(10の姿)が見えてきますか？

幼児教育において育みたい資質・能力を捉えてみましょう。

●ある園の園内研修の様子から

この遊びから、どのような資質・能力が捉えられますか？

雨樋から水がこぼれるたびに、何度もバケツに水を汲んで運んだり、雨樋の向きや接合の仕方を考えたりしながら、どうにかして水を流そうと粘り強く頑張っているよね。

そうですね。だからこそ、水が出たときの満足感や達成感も味わっているのではないかと思います。自分たちでできたという自信にもつながりますよね。

また、水を流すときに、水は上から下に流れることとか、どれくらいの量を流せばうまく流れるのかとか、ああやって水の特徴や性質を知っていくのかなと思います。

それに、バケツを運ぶ子と雲ていの上で受け取る子、ひもを引っぱる子と、役割分担ができていましたね。雲ていの上に座っている子のバランス感覚もすごいと思います。

最初は水を流す量を調整して流そうとしていたけど、それでもこぼれてしまう時に、「雨樋の向きを変えたらどうか。」「接合する部分をガムテープでしっかり留めたらどうか。」など、それぞれの考えを出し合っていましたよね。10の姿の「思考力の芽生え」から見ていくと、友達の考えを取り入れたり、もう一度考え直したりしながら試しているというあたりに、5歳児らしい試行錯誤が見えますね。

その他にも、言葉による表現や伝え合い、有能感など、いろいろなことが育っていますね。

幼児教育において育みたい資質・能力の整理

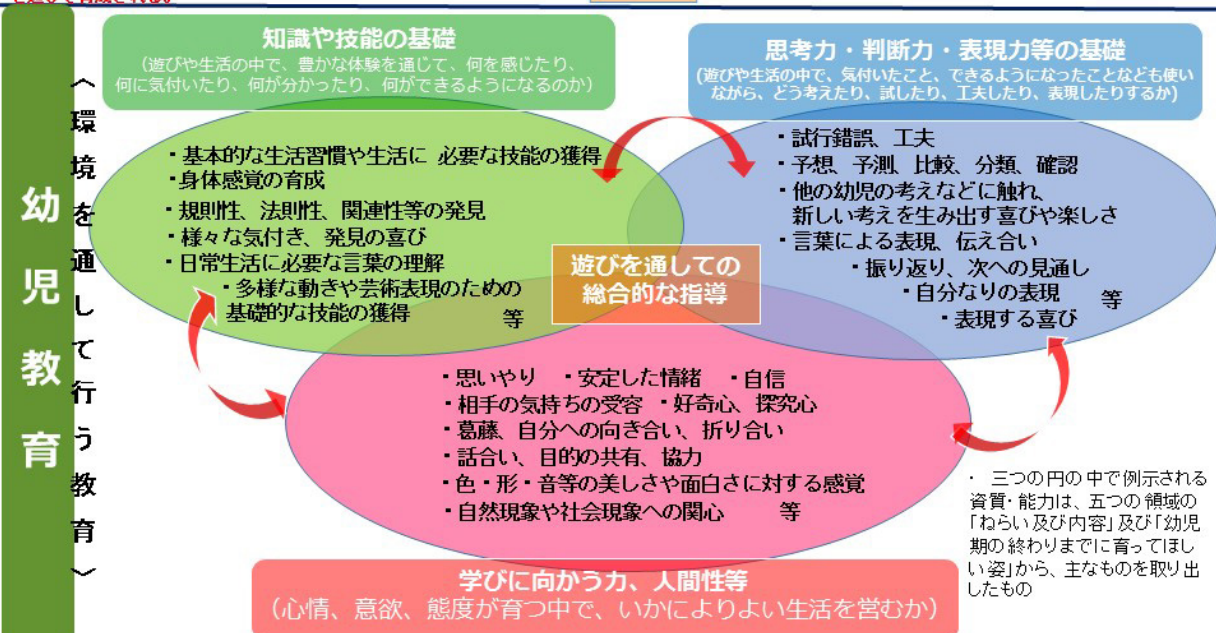
小学校
以上

知識・技能

思考力・判断力・表現力等

学びに向かう力、人間性等

※下に示す資質・能力は例示であり、遊びを通しての総合的な指導を通じて育成される。



会話文の下線部分は、この遊びから捉えられる資質・能力の一例です。左の図は、このような資質・能力を、幼児教育において育みたい資質・能力として、「知識及び技能の基礎」「思考力・判断力・表現力等の基礎」「学びに向かう力、人間性等」の3つの柱で整理したものです。

幼児教育において育みたい資質・能力を育むために何を大切にすればよいでしょうか。

これらの資質・能力は、幼児教育の基本を踏まえ、幼児の発達の実情や幼児の興味や関心等に基づいて展開する教育活動全体によって育むことが示されています。

幼児教育において育みたい資質・能力を、幼児の「自発的な活動としての遊び」を通した総合的な指導の中で一体的に育むよう努めていますか？

1 「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」から保育を見直すこと

「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」は、5歳児に突然見られるようになるものではありません。3歳児、4歳児の時期から幼児が発達していく方向を意識して、それぞれの時期にふさわしい指導を積み重ねていくことが大切です。一人一人の発達に必要な体験が得られるような状況をつくったり、必要な援助を行ったりしているか、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」から保育を見直してみましょう。

2 子どもの発達を長期的な視点で捉えること

資質・能力は、高等学校を卒業する段階で身に付けておくべき力を見通して、長期的な視点をもって育成することが重要です。幼児教育と小学校教育の教育内容や指導方法の違いや共通点について理解を深め、幼児期から児童期への発達の流れを理解することが大切です。子どもの発達と学びの連続性を確保するために、子どもの発達を長期的な視点で捉えるようにしましょう。

3 遊びを通しての総合的な指導の中で、一体的に育むこと

幼児期は、遊びを展開する過程において、諸能力が個別に発達していくのではなく、相互に関連し合い、総合的に発達していきます。

それぞれの資質・能力を個別に取り出して指導するのではなく、遊びを通した総合的な指導の中で一体的に育むようにしましょう。

幼児教育を通した幼児の成長を小学校の先生に伝えましょう。

幼稚園教育要領等には、幼児教育において育まれた資質・能力を踏まえ、小学校教育が円滑に行われるよう、小学校の教師との意見交換や合同の研究の機会などを設け、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を共有するなど連携を図り、幼児教育と小学校教育との円滑な接続を図るよう努めるとすることが示されています。

その際、具体的に見られる「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を生かして、幼稚園・こども園・保育所の教職員から小学校の教師に幼児の成長や教師の働き掛けの意図を伝えることが重要です。

幼児の発達と学びを小学校以降につないでいくためにも、幼児教育において育みたい資質・能力が育まれるよう、保育の充実を目指しましょう。

幼児期の終わりまでに育ってほしい姿

健康な心と体

幼稚園生活の中で、充実感をもって自分のやりたいことに向かって心と体を十分に働かせ、見通しをもって行動し、自ら健康で安全な生活をつくり出すようになる。

自立心

身近な環境に主体的に関わり様々な活動を楽しむ中で、しなければならないことを自覚し、自分の力で行うために考えたり、工夫したりしながら、諦めずにやり遂げることで達成感を味わい、自信をもって行動するようになる。

協同性

友達と関わる中で、互いの思いや考えなどを共有し、共通の目的の実現に向けて、考えたり、工夫したり、協力したりし、充実感をもってやり遂げるようになる。

道徳性・規範意識の芽生え

友達と様々な体験を重ねる中で、してよいことや悪いことが分かり、自分の行動を振り返ったり、友達の気持ちに共感したりし、相手の立場に立って行動するようになる。また、きまりを守る必要性が分かり、自分の気持ちを調整し、友達と折り合いを付けながら、きまりをつくったり、守ったりするようになる。

社会生活との関わり

家族を大切にしようとする気持ちをもつとともに、地域の身近な人と触れ合う中で、人との様々な関わり方に気付き、相手の気持ちを考えて関わり、自分が役に立つ喜びを感じ、地域に親しみをもつようになる。また、幼稚園内外の様々な環境に関わる中で、遊びや生活に必要な情報を取り入れ、情報に基づき判断したり、情報を伝え合ったり、活用したりするなど、情報を役立てながら活動するようになるとともに、公共の施設を大切に利用するなどして、社会とのつながりなどを意識するようになる。

思考力の芽生え

身近な事象に積極的に関わる中で、物の性質や仕組みなどを感じ取ったり、気付いたりし、考えたり、予想したり、工夫したりするなど、多様な関わりを楽しむようになる。また、友達の様々な考えに触れる中で、自分と異なる考えがあることに気付き、自ら判断したり、考え直したりするなど、新しい考えを生み出す喜びを味わいながら、自分の考えをよりよいものにするようになる。

自然との関わり・生命尊重

自然に触れて感動する体験を通して、自然の変化などを感じ取り、好奇心や探究心をもって考え言葉などで表現しながら、身近な事象への関心が高まるとともに、自然への愛情や畏敬の念をもつようになる。また、身近な動植物に心を動かされる中で、生命の不思議さや尊さに気付き、身近な動植物への接し方を考え、命あるものとしていたわり、大切にすることを覚えるようになる。

数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚

遊びや生活の中で、数量や図形、標識や文字などに親しむ体験を重ねたり、標識や文字の役割に気付いたりし、自らの必要感に基づきこれらを活用し、興味や関心、感覚をもつようになる。

言葉による伝え合い

先生や友達と心を通わせる中で、絵本や物語などに親しみながら、豊かな言葉や表現を身に付け、経験したことや考えたことなどを言葉で伝えたり、相手の話を注意して聞いたりし、言葉による伝え合いを楽しむようになる。

豊かな感性と表現

心を動かす出来事などに触れ感性を働かせる中で、様々な素材の特徴や表現の仕方などに気付き、感じたことや考えたことを自分で表現したり、友達同士で表現する過程を楽しんだりし、表現する喜びを味わい、意欲をもつようになる。

「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」と幼児教育の質

栃木県幼児教育センター顧問 神長 美津子



「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」は、各園において、5 領域のねらいや内容に基づいて、幼児期にふさわしい生活を積み重ねることにより、育まれる資質・能力の具体的な姿です。これらは、もちろん、5 歳児後半になって突然に表れるものではなく、3 歳児、4 歳児の保育の積み重ねの結果であり、その園の教育の成果を示すものです。

「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」の活用にあたっては、二つの視点があります。一つは小学校就学時の子どもの姿を小学校教員と共有することで、幼児教育から小学校教育への指導の継続性を図り、円滑な接続を図っていくことです。もう一つの視点は、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を念頭において、環境に関わって生み出される様々な活動に沿って発達に必要な経験が得られるような状況を作る等、指導を考える際に考慮する視点として活用していくことです。

二つの視点は、全く異なる活用ではありません。各園において、学校教育で育成すべき資質・能力が芽生えている 10 の姿を捉え、小学校教育における指導の工夫に繋げていくためには、10 の姿の背景にある指導の過程も整理し伝えていくことが必要です。

「健康な心と体」の姿から考えてみます。5 歳児後半になると、園生活では、見通しをもって行動し、「自ら健康で安全な生活」をつくり出そうとする姿が見られるようになってきます。例えば、5 歳児は、食事の前に手洗いやうがいをするということについては、なぜそうするかがわかっているため、見通しをもち必要な行動がとれます。ただし、それは慣れた園生活だからです。小学校という新しい環境では、子どもと一緒に、何をするか、なぜするのか、どのように行動するのかの確認が必要です。その際、子どもの中に芽生えている「自ら健康で安全な生活」をつくることへの意識を捉えて、指導を工夫する必要があります。そのことは、幼児教育における指導の過程の見直しにもつながります。園では日常的に手洗いやうがいの指導をしていますが、「自ら健康で安全な生活」をつくることへの意識を高める指導はしているでしょうか。また、意識を育てることについて、3 歳児、4 歳児ではどのように指導してきたのでしょうか。その上で、5 歳児では「意識を高める」ためにはどう考えたらよいのでしょうか。

各園で捉えた「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」から、園のカリキュラムや指導を見直し、幼児教育の質の向上を図っていくことが大切であり、そのことは、まさに「生きる力」の基礎を培うことなのです。



発行者 栃木県幼児教育センター

(栃木県総合教育センター幼児教育部) 令和3(2021)年3月発行

〒320-0002 宇都宮市瓦谷町1070

TEL: 028-665-7215 URL: <http://www.tochigi-edu.ed.jp/center/youji/>

研究協力園 認定こども園愛泉幼稚園

資料提供 宇都宮大学共同教育学部附属幼稚園